

忘却 その②

前回、人生の後半においては「忘却」は逃れられない現実であり、否定できない事実であることについて書いた。しかしながら「忘却」を悪者として独り歩きさせてはならないような気もする。忘れるべきこと。忘れて善いこと。覚えなくても善いこと。覚えるべきではないことも数多あることは事実である。そして忘れられないことや、（覚えなくてもよいことを）覚えてしまったこともある。忘れてしまいたいことや、記憶の中から消去したいものもある。逆に忘れていけないことや、覚えておかななくてはならないものもある。

楽しかった。嬉しかった。心地よかった。甘美な・・・自分にとって良かった事は、少なからずあったはずであるが、思い出してみると案外覚えていることは少ない。そして、辛く、悲しく、不快で、苦い・・・自分にとって都合の悪いことの記憶は案外多く、しかも生憎ハッキリ覚えている。

「忘却とは忘れ去ることなり。忘れ得ずして・・・」をラジオの生で聴かれた方は、人生の先輩である。皮肉なことに、いつの間にか忘れ去られた言葉なのかもしれない。

美味しさの記憶。初めて「美味しい」と感じたのは、何時で何かは全く記憶ない。「美味しかった」が一つでないことも、その理由一つであると思う。仕事柄、「美味しい」の記憶は鮮明かつ明確に整理されインプットされているべきであるが、その「美味しい」の自分なりの定義は曖昧で気分によって変化し、基準や定量的な何かなどはないし、最近はそのを食することに少し後ろめたさを感じるようになってきた。美味しいものに出会える「ありがたさ」や「食の大切さ」をより意識するようになってきた。そこで「忘却」が必要となるのである。以前「美味しい」と認知・認識していたものが記憶から消え、またどこかで出会ってまた「美味しい」と認知・認識する。まさに「一期一会」の好循環である。そして、その種類が多ければ多い程、その好循環の輪が拡大する。その連鎖反応を活性化させる触媒が再び「忘れ去ること」となる。

恥ずかしながら、「坐忘」という言葉を最近知った。

坐忘：静坐して心をしずめ、自分を取り巻く現前の世界を忘れること。（出典：広辞苑）
煩悩、自我・・・全て忘れ、何の目的もなく唯座る。無条件に座ることが座禅の行きつく所であるらしい。そして何もかも忘れ「自分が生きていること」すら忘れてしまった瞬間「自分は生かされていること」にハッと気付く（認識させられる）ことなるとも聴く。

ボーッと生きている当文執筆者は、川を渡る間際まで「生かされていること」を理解できないだろうし、理解できた時には、もう向こう岸に渡ってしまって「生かされていたんだ」と過去形で気付かされるのだらうなあ。途中流されていたりして。いやだねえ。